

有働智斐 提出 学位請求論文（課程博士）

『古代日本の神仏交流』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、日本古代の仏教伝来時における周辺諸国との交流を通して、神と仏の関係を明らかにしたもので、その内容は、「序文―神仏習合に関する先行研究―」のあと、四部にわたり十二章の論説を示し、最後に「結論」「初出一覧」「英文要旨」を収める。

第一部「古代人のこころ」は三章からなり、仏教伝来以前の土着信仰（神祇）について、諸先学による鏡の研究成果をふまえ、古代人の信仰を考える。

第一章の「鏡の宗教性―多紐細文鏡と仏獣鏡を中心に―」では、日本と中国・

朝鮮の鏡に対する宗教性を比較し、日本が鏡をヨリシロとして信仰しており、これは外来思想に影響されたものではなく、弥生時代から独自に思想が形成され、紀元後から展開していったことを論じる。そして、鏡表面に美しさを感じ、それが精神に反映しているとす。

第二章の「仏獣鏡とその思想」では、中国における仏教受容の状況と銅鏡分布をふまえ、仏獣鏡の人間像を仏像として捉えられていなかったことを指摘し、仏獣鏡の成立とその思想背景について考察する。

第三章の「明浄正直の心」では、現在の神社神道において重視されている「明浄正直」の思想の淵源を、古代日本人独自の「光明信仰」と「清浄信仰」に求め、これを鏡の神聖性に基づくものとされた。また、天武朝の頃に『金光明経』の影響により、「明浄正直」の語が用いられたとする従来の見解を否定し、六世紀に伝来したと考えられる『法華経』や『涅槃経』の影響が強いことを論じる。

第二部「百済の仏教受容」は三章からなり、六世紀における百済王の信仰と百

済における仏教受容と展開について考察し、新出の考古資料から、日本へ百済仏教が伝えられた過程を明らかにする。

第一章の「六世紀における百済王の信仰」では、百済における神と仏教受容を検討する。百済の国家成立当初の宗教・思想では、馬韓時代からの土着信仰と高句麗などの移民の信仰が並立していた。その後、中国の宗教・思想を受容し、六世紀初頭から仏教教学を受容する。百済の王が求めた仏教は、大乘菩薩道思想であり、百済から日本へ伝えられた仏教は、聖明王・威徳王による仏教実践修行の一つとして、伝道活動、すなわち菩薩道の実践であることを論じる。

第二章の「百済仏教の展開―仏教伝来と舍利信仰を中心に―」では、漢城時代の百済仏教は高句麗仏教と同じく道仏二教が共存していたが、その後の熊津時代には、南朝の中国仏教を受容したこと、梁の武帝が仏教伝道活動に邁進し、中観思想を中心とした仏教が百済に流入したことを論じる。また、百済への舍利信仰の伝播は、五世紀末から六世紀初頭と考えられること、百済では『法華経』『涅槃

槃経』を受容し、釈尊の遺骨を供養することが百済王室の安寧に繋がるとし、造塔事業が六世紀中頃から盛んになることを指摘した。

第三章の「威徳王の寺院とその思想　―陵山里寺址と王興寺址を中心として―」では、威徳王の実名「昌王」の名を刻んだ二つの考古資料を検討し、六世紀の百済王の基準年代を確定する。また、陵山里寺と王興寺の建立意図は、死者の菩提を弔う供養を目的としたと考えられ、その創建は菩提寺院として建立されていること、これが飛鳥時代の造像銘によく見られる「為亡父母供養」の思想と結び付くことなどを論じる。

第三部「欽明・敏達朝の宗教交流」は三章からなり、六世紀日本の神祇信仰が百済仏教をどのように捉えたか考察し、仏教公伝の年代を再検討する。

第一章の「仏教受容の展開」では、百済の国家政策に仏教は取り込まれ、祭祀制度も変容したと論じ、日本では仏教受容にあたり、神祇信仰は仏教と融合・乖離を繰り返し、独自の仏教解釈に力を入れたとみる。また、六世紀における日本

の宗教政策は、儒教や仏教を段階的に受容するなか、各氏族の神祇祭祀を再認識し、仏教受容によって神祇祭祀の重要性が増したことを指摘する。

第二章の「偶像崇拜と仏教公伝年代」では、『日本書紀』最初の仏教記事である欽明天皇六年条について考察する。この部分はすべて朝鮮半島記事であるため、朝鮮の記録が参考にされたこと、記事が『金光明最勝王経』の潤色という従来の指摘について訂正し、『阿含経』の潤色であるとした。また、欽明天皇六年の「百濟造丈六仏像」記事の年代を検討すると、同年に梁から請求した宝物を日本府へ贈る記事を含めて、『三国史記』聖王十九年（五四一）条や『梁書』の記事と一致している。近年の百濟史の研究成果をふまえると、『日本書紀』欽明天皇六年条が「百濟三書」に従っていると解釈できるため、欽明朝における百濟仏教記事は信憑性が高く、仏教公伝は五四八年であると論じる。

第三章の「建邦之神」と「日祀部」―神祇祭祀の制度と神道の勃興―では、『日本書紀』欽明天皇十六年条「建邦之神」と祭祀制度について論じる。百

済の国家体制は『周礼』に基づいた政治理念と祭祀制度が行われていたことを指摘し、六世紀初頭には五経が百済から日本に伝来し、祭祀儀礼が受容される。とくに『周礼』に記す「日官」は百済官制の祭祀職掌にもあったが、それに倣って日本では天皇専属の祭祀職掌として「日祀部」を設置したこと、『日本書紀』における「建邦之神」の祭神は百済の神祇をさすものとした。

第四部「神と仏の融合」は三章からなり、百済と日本における神仏を比較検討し、仏教を伝道するにあたり、教化の状況を調べ、「崇り」と「因果」の認識を考察し、日本の神観念に則した表現として「蒼生」を取り上げ、神仏融合について考える。

第一章の「仏神と崇り」では、仏教伝来当初、仏教と土着信仰との融合と乖離が、崇りの現象として表現されていることに注目し、神と仏の「崇り」現象は疫病の流行として記述されたとみる。また、廃仏崇仏の記事については、仏教の因果応報の思想が影響していると指摘する。一方、廃仏の行為については神祇祭儀

の一種「祓え」や「神送り」と類似したものであり、「仏」を「客人神」として認識し、日本の祭祀構造に則した記事であると解釈する。

第二章の「金製舍利奉安記」と『維摩経義疏』では、韓国・益山弥勒寺址出土「金製舍利奉安記」銘文中の「下化蒼生」について考察する。「奉安記」の銘文は『十七条憲法』『三経義疏』と同じ思想がみられることから、「奉安記」と太子撰『維摩経義疏』の思想は朝鮮・日本で形成された大乘菩薩道の思想であると説く。また、太子撰『維摩経義疏』の「百行云」は法雲の『法華義記』に記す「百行偈」であると指摘する。

第三章の「蒼生（アヲヒトクサ）と衆生」では、『日本書紀』の「蒼生」、『古事記』の「青人草」が神代の時代にのみに使用され、人代には使用が無いこと、「蒼生」の語は日本特有の世界観が表現されていると指摘する。

論文審査の結果の要旨

これまでの神仏関係の研究は、個別の研究は進んできたものの、これを総合的に把握しようとする視点に欠けていたところがある。とりわけ、六世紀の仏教と神祇との交流過程において、日本の神祇と百濟の仏教に対する信仰・思想の解明が断片的で不十分であったことが、研究の行き詰まりになっていた。

本論文は、こうした状況を批判的に捉え、文献史料の読み直し、とくに仏典研究の再検討に取り組んでいること。また、考古資料の分析、とりわけ新出の韓国で発掘されてきた寺院調査の資料分析を重視する立場から考察を加えているところに新鮮味がある。

その研究姿勢は、著者の主研究である仏教学・仏典研究を基礎に、歴史的検討を加え、これに神道学・考古学にも視野を広げ、神仏交流の実態を明らかにしようとしたものといえる。

本論文の柱となっているのは、百済における仏教の性格を明らかにしたことである。これまで、百済仏教については、史料が少なく、詳しい実態は不明であった。近年、韓国の旧百済地域における考古学の成果が報告されており、扶余・王興寺跡から発掘された「昌王」（威徳王）の名を刻む青銅製舍利函をはじめとする新出の考古資料の銘文を手がかりに、百済王室の信仰を論じた。また、六世紀における百済王の仏教理解は、仏教を弘めて伝道することを功德とする大乘仏教の菩薩道思想に影響をうけており、日本へ仏教を伝えた意図も、この一環として行われたとする見解は、本論文の主要な論説である。

百済仏教の系譜・性格を解明していく試みは、当然、日本へ仏教が伝来する過程へ、直接繋がっており、なかでも、『日本書紀』欽明天皇六年条は、重要な文献史料の一つとなっていて、この史料性の検討に焦点を絞り、百済から日本への仏教展開の方向性を明らかにしている。

欽明天皇六年条は、百済側の記録を参考に記されたことを論じ、こうした記事

は、中国の『梁書』の記事と一致し、近年の韓国考古学の成果に照らして、信憑性が高まったことを論証する。さらに同年の「百濟造丈六像」記事の信憑性へと論究はすすみ、百濟の聖明王が日本の天皇の福德を願って造仏が行われたことも史実と読み取るなど、百濟と日本の仏教交流を鮮明にしている。また、仏教公伝をこれまでの二説（五三八年・五五二年説）とは距離を置き、百濟側の史書にみえる五四八年説を支持していることは注目される。

『日本書紀』欽明天皇十六年条「建邦之神」についても、日本から百濟の王に對して祭祀することを進言した「建邦之神」について、この神を百濟建国の神であるとみる。この記事は「建邦之神」を日本の神とみる見解も根強く、日本の対外関係の姿勢を明確にできる根拠となるところであるので、さらなる論証の補強が求められる。

また、仏教の日本への伝来について、『日本書紀』の欽明天皇紀と敏達天皇紀の記事に注目することは当然であるが、これを仏が崇るといふ現象に焦点を合わ

せ、疫病の流行という、古代の人々がもつとも恐れた不安との対応で、史実として理解を深めようとした観点、また崇りと「因果応報」論への言及、さらに敏達紀仏教記事の根拠に、『大般涅槃經』の存在を指摘したことなど、斬新な視点は多い。このほか、偽撰ともいわれる聖徳太子撰『維摩經義疏』と新出の考古資料の銘文との対比など、刺激的な論議が各所にみえる。

本論文のもう一つのこだわりは、神道・神祇へ視点を深め、積極的な論議を試みていることである。冒頭「古代のこころ」の論考では、日本が仏教伝来以前から、鏡を神のヨリシロとし、神体的理解を示していたこと、インド・中国の仏典には、こうした意識はなく、鏡の信仰に独自性を見出そうとし、日本の基層信仰にある鏡の宗教性は、鏡表面の美しさを愛で、ここに正直を映し出す表象として重視したことを論じ、日本人の宗教性の根元に迫ろうとしている。

また、本論文最後では、韓国・益山弥勒寺址出土「金製舍利奉安記」銘文に記される「下化蒼生」に注目し、神話に記される「蒼生」「青人草」を取り上げ、

日本の神観念を考察し、後世の日本思想の代表的な語となる「山川草木悉有仏性」という考えに行き着く源流を古代の神仏関係に求めたことなど、興味深い指摘がある。

本論文に掲載された論点は多く、論考の随所に新知見や積極的論議の態度が示されているが、問題点も残されている。

それは、全体として結論を急ぐあまり、論証が不十分な部分もある。論考の各所で仏典研究に基づいた字句の比較に考察が集中し、仏典受容の背景にある思想性の追究まで深めることは、未だ十分とはいえない。また、百濟の祭祀制度や『周礼』の影響を受けて、六世紀日本に神祇伯が存在したことをはじめ、日本に祭祀体制・制度が確立していたとみることには、なお検討の余地がある。

本論文に示された研究姿勢は、誰にも負けない意気込みが感じられるので、今後この課題に取り組み、神道と仏教の双方を軸に据えた研究を、弛まず研鑽しつづけてほしいと思う。

最後に吉田兼俱が神道伝授にあたって好んで記した「慎みて怠ることなかれ」という詞を付記して、これからの研究の深化に期待したい。

以上のとおり、本論文は古代日本および百濟を中心とした神仏交流を詳細に論じた研究業績であり、この分野の研究に新たな方向性を示した成果として評価される。

よって、本論文の提出者有働智契は、博士（宗教学）の学位を授与せられる資格を備えているものと認められる。

平成二十四年二月十六日

主査	國學院大學教授	岡田 莊司	印
副査	國學院大學教授	笹生 衛	印
副査	國學院大學教授	鈴木 靖民	印
副査	東京大学大学院教授	蓑輪 顕量	印